

テクノロジーと法の未来へ

Vol.38

FACULTY OF
GLOBAL INFORMATICS

国際社会が抱える問題を「情報の仕組み」と「情報の法学」の視点で
分析・解明し、解決策を論理的に構築する、iTL独自の学びに迫ります。

はじめに

私は国際情報学部で村田雅之先生のゼミに所属しています。村田ゼミでは、「さまざまな要因が複雑に絡み合った問題」を発見し、データの収集・分析・解釈を試み、解決や改善の「いとぐち」をつかみ、方法論・ツール・メディア表現の検討と選択を行い、効果的に伝達や発信ができるスキルを修得することをめざして学んでいます。

2年次後期および3年次前期には自身で個人研究のテーマを設定し、データ収



国際情報学部国際情報学科4年
神奈川県立厚木高等学校出身

こやま ゆきな
小山 公那

映像コンテストへの挑戦で 身につけた「伝える力」

集、分析を行い、それぞれ5000字程度の研究論文を作成しました。ゼミ生がおのの関心領域に基づいて多種多様なテーマに取り組み中で、ゼミ生同士、お互いにフィードバックを行うことで、「質問する力」も養われました。3年次後期には、複数の映像作品を制作しました。学外コンテストへの応募など、学外の人の目に触れて評価されることを前提に映像作品を制作することで、他者の視点を意識した「表現力／発信力」を高めました。

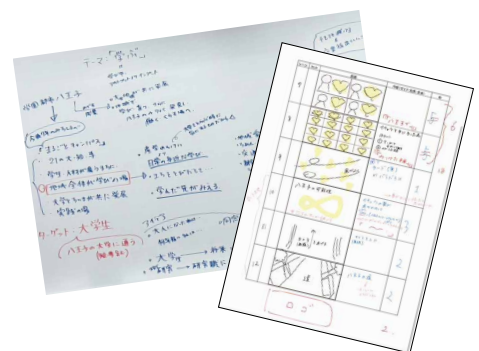
ここでは、3年次後期の「国際情報演習Ⅲ」において取り組んだ、短時間の映像作品の制作活動について紹介します。

はじめての映像制作

「国際情報演習Ⅲ」では、コンテストごとにグループに分かれ、各メンバーが3作品以上、学外コンテストに応募することが求められていました。

私たちが最初に取り組んだのは、「八王子学生CMコンテスト」と「OAC学生広告クリエイティブアワード」。映像制作を進めるにあたり、まずは「何を伝えるべきか」という課題の整理から始めました。課題の整理においては、3年次前期までで磨いた情報収集能力を総動員し、募集要項、過去の受賞作品、対象の商品や市についての公式情報など多角的な情報を集めました。

作品ごとにテーマや求められる表現は異なっていたものの、課題を整理する中でいずれにも共通していたのは、「限られた時間の中で、いかに情報を整理し、視聴者に伝えるか」ということ。短時間の映像では、伝えられる情報量に制約があるため、単に内容を詰め込むのではなく、「何を伝え、何を省くのか」という判断が重要になります。そのため、制作においては表現以前に、伝える内容そのものを整理することが求められました。



テーマについて協議したときのホワイトボードと「八王子学生CMコンテスト」の絵コンテ（一部抜粋）

最も伝えたい内容を整理した後は、絵コンテやVコンテ（仮の映像で動画の流れを示したもの）の作成をしました。これは調査研究においても共通することですが、どんなに良いアイデアでも、実現できなければ意味がありません。自分たちの伝えたいことは、自分たちができる範囲でどうすれば表現できるのか、という実現可能性に関しては、慎重に検討を重ねました。

また、映像制作においては、その表現は本当にターゲットに伝わるのか、「受け手の視点」を持つことも欠かせません。ゼミ活動の中で、お互いにほかのグループの作品に対するフィードバックを行うことで、常に客観的な視点を持つようになっています。

このように段階的なプロセスを踏み、修正を繰り返すことで完成した作品は、



第14回「OAC 学生広告クリエイティブアワード」表彰状



「八王子学生 CM コンテスト」授賞式にて



「東峰村動画コンテスト」応募作品（一部抜粋）

テーマの解釈や表現力が高く評価され、複数のコンテストで実績を残すことができました。

—令和7年度「八王子学生CMコンテスト」審査員賞（CMWG選出）、第14回「OAC学生広告クリエイティブアワード」企業賞（明治賞）映像部門グランプリ—

学部の調査補助を用いて、「東峰村」へ

3作品目の応募先として選んだ「東峰村動画コンテスト」では、国際情報学部の国内調査補助制度を利用して、現地（福岡県朝倉郡東峰村）で撮影する試みをしました。撮影日程として確保できるのは2日間。限られた時間の中での撮影になるため、事前調査を念入りに行いました。撮影では、村の方々の温かさや空気の綺麗さなど、現地に行かないとわからない魅力に触れることができ、「実際に現

地へ赴くことの大切さ」を実感することができました。これらの経験をもとにした作品は、共感を呼ぶ温かい描写と独自の視点が高く評価され、グランプリを受賞することができました。

おわりに

本活動で経験した、課題を構造的に捉え、設計し、それを適切な形で表現するという一連の過程で身につけた「思考力」および「発信力」は、不確定な「正解」を求められるAI時代を生き残るために分野を問わず活かせる力になると考えています。また、制作過程ではゼミ生同士でのフィードバックを通じて、自身では気付かない視点や課題を発見する機会が多くありました。こうした経験を重ねる中で、「適切な問いを立てる力」や「他者の視点を取り入れる力」も養われたと感じています。今後も積極的に学外コン

テストに応募することで、これらの力を磨いていきたいと思っています。
結びに、忌憚のない意見交換のできるゼミメンバーをはじめとして、撮影にこ

協力いただいた方々やサポートしてくださった事務室の方々、いつも熱心に指導してくださる村田先生に心より感謝を申し上げます。

